

# 指導資料



鹿児島県総合教育センター

## 国語 第100号

- 小, 中学校対象 -

平成16年5月発行

### 児童生徒相互のかかわりを活性化する国語科学習指導

国語科学習指導においては、児童生徒が自分の考えをしっかりともち、論理的に意見を述べたり、目的や場面に応じて適切に表現したりするなど、相手と双方向的に交流する中で、自分の疑問や課題を解決する力を身に付けることがより一層求められている。小学校及び中学校学習指導要領の目標の中にも、児童生徒が「伝え合う力を高める」ことの重要性が位置付けられている。これは、単に「話し合う」、「伝え合う」活動を重視するということではなく、系統性等に十分に配慮しながら、意図的・計画的に伝え合う力を高めることを目指している。つまり、「話すこと・聞くこと」の領域における言語活動を活性化し、主体的な思考力や表現力、問題解決能力など、「生きる力」を身に付けさせることをねらいとしているのである。

そこで、本稿では児童生徒の伝え合う活動が最もよく表出するかかわり合いの場面に着眼し、特に「話すこと・聞くこと」の領域において、自分の思いや考えを自分の言葉で相手に伝え、相手の言葉をしっかりと理解した上で、合意形成に向かうといった一連の言語活動を中心に、児童生徒相互のかかわりを活性化する国語科学習指導について述べる。

#### 1 「伝え合う力を高める」とは

##### (1) 伝え合う力を高めることの意義

児童生徒が音声言語によって他者とかかわりながら伝え合おうとする場合、自分の言葉で自分の世界を切り開こうとしたり（対自意識）、自分の言葉で他者との関係を結ぼうとしたり（対他意識）するようになる。さらには、他者としての自分を認識することができたり（自己意識）、言語活動を自覚して行おうとしたり（対言意識）するのである。

つまり、「伝え合う力を高める」とは「生きる力」を支えるための大切な要素の一つである。これは、まさしく児童生徒の基礎・基本を支える学力を定着させるための不可欠な学習の一つであると言える。

##### (2) 伝え合う力を高める際の留意点

児童生徒がある物事を伝えようとするとき、「話し手」はその物事を認識し、認識した内容を「言葉」で表現して相手に伝えようとする。一方、「聞き手」は言葉をとらえ、相手の伝えようとする内容を理解しようとする。

ところが、言葉を媒介としたこうした流れの中で、特に、伝えたい内容を話し手が言葉に置き換える際と、聞き手が相手の言葉から内容をとらえようとする際に、それぞれの段階における言語情報の一部に損失が生じる。

そこで、自分の言葉で表現しようとする際と、相手の言葉を理解しようとする過程、つまり、話し手と聞き手の相互がかかわろうとする過程において、できるだけ正確、かつ的確に伝え合うための工夫が必要になるのである。こうした工夫を凝らすことが、伝え合う力を高めることにつながると考える。

ここで、留意したい点が二つある。

一つには、話し手が言葉で相手に話そうとする直前や直後、相手に話しながらかかわる時、聞き手が相手の言葉を聞きながらかかわる時などの場面である。これらの場面では、相手に伝えたい内容を機械的にえたり、相手が伝えたい内容を表面的に理解したりするだけでなく、互いの思いや立場、意向などにも十分配慮しながらかかわり合うことを重視しなければならないということである。ただ、単に伝達のみを目的に、形式的に言葉を発信したり、受信したりするという言語活動では、言外に醸し出される背景を無視した味気ない言語活動になる危険性があるからである。

二つには、話し手から聞き手への一方通行的な伝達活動のみに終始しないよう、配慮しなければならないということである。伝え合う活動においては、一方向的

な伝達だけでなく、逆方向的な発信（質問）や相互の発信（意見交換）が繰り返されてこそ、伝え合う力が高まったと言えるからである。

## 2 「話すこと・聞くこと」の指導の改善

### (1) 「話すこと」の指導の充実

話す力を身に付けさせるためには、児童生徒が話す内容（情報）を正確に把握し、話すべき相手を的確に理解し、自己の話す意欲を高め、話し方を工夫しながら活動させたい。つまり、相手の立場や思考を考慮に入れ、場に応じた話し方を工夫する上で、適切な語句を選んだり、常に説得力のある表現を考えさせたりするなど、多岐に渡る状況について十分に配慮する必要がある。

### (2) 「聞くこと」の指導の充実

「聞くこと」は、聞く（hear）、聴く（listen）、訊く（ask）の三種類に分類することができる。特に、国語科学習においては耳を傾け、注意して「聴く」活動であったり、相手に問い掛けて尋ねる「訊く」活動などを重視している。実際の国語学習の場面では、話された内容の中から必要な情報を選ぶといった選択的な聞き取りや、話された事柄の相互関係や妥当性を判断し、批判的に聞き取ったり、話された内容について質問したり、反論したりするといった創造的な聞き取りなどの、様々な聞き取る力を身に付けさせることが必要である。

### (3) 「話し合うこと・聞き合うこと」の指導の充実

児童生徒が、話し合うべき話題や目的、場面に応じてインタビュー・アドバイスに取り組むことは、協働して創造するという生産的な活動につながる。このインタビュー・アドバイスのような活動を繰り返すことで、対談やグループ討議、フリートーキング、ディベート、パネルディスカッションなどの状況に応じた言語活動を実現することができるのである。

### 3 児童生徒相互のかかわりを活性化させる手掛かりの工夫

児童生徒が言語活動を媒体としてかかわり合う場合、前述のようなことを十分に留意せずに取り組んでしまうと、うまく伝わらないというだけでなく、深く考えようとしめない表面的なかかわりや、話し手だけが一方的に伝達するという形式的なかか

わりになってしまうおそれがある。つまり、児童生徒がかかわり合う際には、相互がしっかりと情報を把握し、できるだけ正確に相手の立場にも配慮しながら、思慮深く判断して臨まなければならないのである。

そこで、伝え合う際の情報の損失を最小限に押さえ、よく考えながら伝え合おうとする双方向的なかかわりを実現するために、児童生徒に「かかわりを活性化させる手掛かり」を提示する等の工夫が必要となる。

#### (1) 児童生徒相互のかかわりを活性化させる手掛かりの整理・分類

児童生徒が相互にかかわりをもつ際、児童生徒間に介在するものや相互のかかわりの活性化に影響を与えるものなどをとらえ直し、以下のように整理・分類し、それらの具体的、かつ、効果的な工夫についてまとめた。

#### 具体的な手掛かりの工夫

A 言語の活用	B 時間の活用	C 人的な活用
<p>児童生徒のものの見方や考え方、意見、鑑賞などといった言語活動に取り組む際の目標の設定と、その効果的な提示</p> <p>学習目標や学習課題などのねらいや見通し、自己評価の観点などの明確な提示と学習の節目ごとにおける再確認</p>	<p>話し合い活動等における十分な検討（思考、再考等）時間の確保や効果的な設定とその時期</p> <p>深い思考を導いたり、確実に見直したりすることができる相談タイム（話し合いや打合わせなど）等の場</p>	<p>かかわる人数の抵抗差を考慮したペア（相談相手）活動やグループ活動（共同体、対立等）の場の設定</p> <p>かかわりの活性化を促すゲストティチャーや支援する教師などの効果的な活用（TTの活用）</p>

D 環境の活用	E ものの活用
<p>相互のかかわりを活性化させる討議の場や手法等（会議や対談、グループ討議、フ</p>	<p>教科書や教材・教具、資料などを参考にさせながら相互にかかわりをもたせる</p>

リーディング、ディベート、パネルディスカッションなど)の効果的な設定

積極的なかかわりを引き出す効果的な学習形態等

本物に近い体験等につながるテーマ会議(子ども議会やサミットなど)や活動(手紙作成やEメール送信など)の設定

調べ学習の場

ノートやメモ、感想文等を基に活動させる積極的なかかわりの場

児童生徒相互のインタビュー・アドバイス等に取り組みさせる際のワークシート等

## (2) 手掛かりとなる情報をもたせた実践例

言語活動を媒体としてかかわり合う場合、相手に伝えたい情報の記録や資料等、自分の考えをまとめたメモ等を手元に持って伝え合う活動に取り組むと、児童生徒は意欲的、積極的に臨むことができる。

右の写真は、出水市立西出水小学校の宮路直子教諭が、1年生の「てがみをかこう」の実践



で、「教えたいことを集めて、カードに書いてみよう」という学習課題を設定し、保護者に届けることを目的に、担任の先生を紹介する手紙を作成させた実践例である。

まず、担任の先生に関する「見たこと、したこと、きいたこと、はなしたこと、できたこと」という事実関係(観察)の観点を児童に提示し、自分の力で書けるだけカードに書かせる。次に、「おもったこと、かんがえたこと」という心情関係(気持ち)の観点を示し、書ける範囲でカードに記入させる。そして、自分で書きためたカードを基に、隣の児童と話し合わせ、カードを追加させる。その後、

にグループで同様に話し合わせ、更にカードを膨らませた。手紙は、実在の相手を設定させ、丁寧に仕上げて届けさせた。

この実践を整理すると、下記のような手掛かりの要素が含まれている。

- ア 情報収集の観点の提示(A - )
- イ カード(付箋紙)の活用(E - )
- ウ 十分吟味・検討できるような幾重にも話し合わせる場の設定(B - )
- エ 話合いの抵抗差に配慮した段階的な活動の設定(C - )
- オ 本物の手紙としての作成(D - )

このように、児童生徒の思考や表現の手掛かりとなる情報と時間的なゆとりを保証しながら工夫することで、相互のかかわりを十分に活性化させることが期待できるのである。

今後、各学校においては、意図的、計画的、系統的な指導を工夫することにより、これまで以上に児童生徒相互のかかわりを活性化する国語科学習指導の充実が期待される。

### 【参考文献等】

日本国語教育学会『国語教育辞典』(2001)朝倉書店  
相澤秀夫著 外『国語科教育研究』(1988)学芸図書  
(教科教育研修課)